

業医では治療困難と説明を受け、当科を紹介され受診となる。外科的矯正治療は希望していない。正貌は対称的で、側貌は convex type を呈していた。大臼歯関係は Angle II 級でオーバージェットは +5.5mm、オーバーバイトは -4.5mm であり、上顎歯列弓の狭窄による小臼歯部の交叉咬合と前歯部開咬が認められた。ALD は上顎 +2.0mm、下顎 -2.5mm であった。顔面正中に対し上顎歯列正中は一致し、下顎歯列正中は 0.5mm 右偏していた。全顎的な歯槽骨の水平性骨吸収と上顎左側、下顎左右側第三大臼歯が認められ、上顎右側第一大臼歯は欠損し、多数歯に補綴物が装着されていた。側面頭部エックス線規格写真分析の結果、骨格性 2 級、ハイアングルを示し下顎の後方回転を認めた。上下顎前歯歯軸は標準的であった。口腔習癖として舌突出癖を認めた。以上より、下顎前歯部叢生を伴う Angle II 級、骨格性 2 級の開咬、下顎後退による上顎前突症例と診断した。外科的矯正治療と矯正治療単独での治療方針を説明し、患者は矯正治療単独の治療方針を選択された。上顎狭窄歯列弓と舌機能を考慮し口腔容積を縮小しないように小臼歯の非抜歯治療を行う治療計画とした。治療方針として上顎左側、下顎左右側第三大臼歯の抜去により遠心移動スペースを獲得し、歯科矯正用アンカースクリューを固定源に用いて上顎歯列の遠心移動および上顎大臼歯の圧下を行い、Angle I 級の大臼歯関係および良好な被蓋関係を獲得することとした。上下顎歯列にブリアジャステッドアプライアンス (.022 slot) を使用し、上顎にはトランスパラタルアーチを併用した。上顎左右側第二小臼歯・第一大臼歯間に歯科矯正用アンカースクリューを埋入し、これらを固定源に上顎歯列の遠心移動および上顎大臼歯のコントロールを行った。舌位の改善のため MFT を行った。

【結果および考察】 歯科矯正用アンカースクリューを適用し、上顎歯列全体の遠心移動と上顎大臼歯の圧下を行い、下顎の反時計方向への回転により上顎前突と骨格性開咬を改善した。患者の希望であった矯正治療単独（非外科的矯正治療）で非抜歯にて動的治療を終了した。現在、保定管理中で良好な咬合を維持されている。患者は治療

結果に満足され、QOL の向上に貢献できたと考えている。

【結 論】 歯科矯正用アンカースクリューを使用し、上顎大臼歯の遠心移動および圧下を行うことで、非抜歯矯正治療の適応範囲拡大や外科矯正治療のボーダーライン症例におけるカモフラージュ治療への適用が期待できると考えられた。

4) 放射線診断学講座におけるエレクトィブスタディ講義内容に関する実験的検討（平成27年度）

○原田 卓哉，茂呂祐利子，渡部 剛史
(奥羽大・歯・放射線診断)

【目 的】 本学歯学部では平成27年度より「エレクトィブスタディ」(Elective Study, ES) として週2コマのエキストラな講義を計画している。そこで歯科放射線学においてよりよい学習経験を学生に獲得させるため、ES に対応できる講義内容を検討したところ、若干の知見が得られたのでその概要を報告する。

【対象および方法】 対象は本学歯学部 に在学する第1学年から第4学年までの学生約150名である。これらの学生を対象として、歯科放射線学に関する学年横断的な平成27年度授業内容を週2コマ(2時間)30週で施行する場合のESコンテンツ開発に関し、以下の観点から検討を行った。

- ・整合性（シラバスに合わせるべきか独自性を重視するか）
- ・妥当性（凡庸な内容かアドバンスな内容か）
- ・検証可能性（経験度向上を確認できるか）

【結 果】

1) 整合性に関して

自科目ならびに他科目のシラバスを重視した場合は、コンテンツ開発は容易であるが学生に飽きられる可能性が予想された。一方、独自性を重視したコンテンツ構築では学生の好き嫌いがクローズアップされるおそれが考えられた。演題名 放射線診断学講座におけるエレクトィブスタディ講義内容に関する実験的検討（平成27年度）